

子どもと生活

—昔の暮らしから学ぶこと—

山本郁子

姫路日ノ本短期大学 〒679-2151 兵庫県姫路市香寺町香呂 8 9 0 番地

Children's Daily life

—To learn on lives of children and wisdom of our ancestors in the early Showa-era —

Ikuko Yamamoto

Himeji-Hinomoto College, 890 Koro, Kodera-Cho, Himeji, 679-2151, Japan

1 はじめに

幼児教育は、生涯にわたる学習の基礎を作り「あと伸びする力」を培うことを重視している。幼児は、身体感覚を伴う多様な活動を経験することによって、豊かな感性を養い、生涯にわたる学習意欲や学習態度の基礎となる好奇心や探究心を培う。小学校以降における教科の内容等について実感を伴って深く理解できることにつながる「学習の芽生え」を育てている。幼児の内面に働きかけ、一人ひとりの持つ良さや可能性を見だし、その芽を伸ばすことをねらいとするため小学校以降の教育と比較して「見えない教育」と言われている。¹⁾

しかし、現状は、従来に比べて子どもの育ちが何かおかしいのではないか。子どもを取り巻く環境が悪化しているのではないか。子どもの成長に関する懸念が多く聞かれるようになっている。

農業が主産業であった時代、子どもたちは幼少の頃から家業や家事の手伝いをしていた。家の手伝いは、遊びや勉強に優先することが多く、これらの労働から勤労や物を大切にするなど生きる力

を学び、家族の絆が生まれた。

しかし、高度経済成長期になると工場制機械工業が中心となり、工場で働くようになると、中心的産業であった農業は衰退し、農作業などで育まれた精神は疑問視されるようになった。²⁾

そこで、昭和初期の子ども達の家庭における役割を戦前・戦後まで使われた民具を使って体験し、その手伝いの様子を学ぶことが、現代の子ども達の生活を見つめ直すことになり、新たな未来が切りひらけるものと確信する。

2 授業の概要

香寺民俗資料館館長による体験授業



香寺民俗資料館内部

- (1) 石臼をまわして穀物を粉にし、食生活が豊かになったことを学び、子どもたちのおやつも臼から生まれたことを体験する。
- (2) 稲作の栽培・収穫過程を学び子どもたちがどのように農作業に携わったことを知り、家庭と子どもたちのかかわりから家庭生活について考える。
- (3) 家庭で綿を作り、綿糸から布を織り、衣類を作ったことを学び、現代の衣服と比較し今後の在り方を考える。

①臼とおやつ

臼は、搗き臼と挽き臼があり、今回取りあげるのは挽き臼である。古くは、奈良時代に伝わったようだが、生活の用具として広まらず、時代が過ぎて室町時代に再び大陸より伝えられ、生活の用具として広く普及した。以後、臼は食料を作るのになくてはならない道具として江戸期に大いに使われ、長く昭和の中頃まで活躍した。

古くから人々は、穀物を粉にすれば、食料として食べやすく、料理の幅が広がることを知っていたが、石皿や搗き臼では、時間がかかり、均一な粉ができなかった。それに比べ石臼は回転するので、米・麦・豆・そば等の穀物をほぼ均一な粉にすることができ、しかも短時間に多く作ることができる。³⁾

例えば、米なら少々質が悪くても粉にして団子ができ、中にあずきを入れるとちまきができる。大豆なら少し炒ると香ばしいきな粉ができ、そばにいたっては、水田のできない山畑や斜面の畑など、少々荒れ地でも栽培でき、それを粉にすることによってゆでそばができ、山間地の食生活に栄養を補給することができた。

【石臼】



上臼



下臼の表面



上下の溝

今回の体験では、香寺民俗資料館にある臼を回して小麦を粉にし、すりあがった粉を試食した。



炒った小麦

・小麦をフライパンで少し焦げ目がつくくらい炒ると香ばしい匂いがする。

・炒った小麦を臼の上の穴から少し入れ左回転（時計の針の反対回し）する。一度に多く入れると上下の溝に麦があふれ目の粗い粉になってしまう。この状態を「**臼が踊っている**」と言う。

臼の回転と麦を入れる量を調整しながら回していくと香ばしい香りのする粉が出てくる。これを「**はったい粉**」と呼ぶ。砂糖を少し入れて食べることもできるし、白湯を入れて練って温かいうちに食べるとさらにおいしい。極めつけは、砂糖を入れ練って棒状にしたものを切り、**げんこつ飴**として食べる。

このように、はったい粉は、戦後の子どもたちのおやつとして親しまれた。このように臼からできる粉は調理の仕方において貴重な食料になった。

これらのことから穀物や野菜など食料を粗末にしない心が培われた。⁵⁾

学生の感想

初めて、石臼体験をしました。臼で大豆や麦を擦る時、力があることに驚きました。石臼で擦るという普段できない体験ができました。

また、昔の人が食べていたおやつも食べました。現代には、合わないと思いました。

昔の人は小さい頃から食べていたということも知りました。

初めてはったい粉のおやつを作って食べました。今の子どもは昔と比べてすごく贅沢できていると思いました。

昔の人は、おいしいと思って食べていたのか、これしかないと思って食べていたのか気になりました。

現在では、家庭で臼を使うことはほとんど

ないが、臼から生まれる粉が、料理の幅を広げるだけでなく、食生活を豊かにした。

貧しい山村で生きながらえたのは臼のおかげと言っても過言ではない。

※はったい粉は、本来、醸造用や飼料として使われる大麦で作るが、入手困難なので小麦を使用した。

② 昭和初期の農作業と子どもの手伝い

㊦ 米の歴史

日本の原始米は赤米だったと考えられている。伝わった時期は今まで登呂の遺跡などで知られるように弥生時代とされていたが、相次ぐ遺跡の発掘により縄文晩期には伝わったとされている。これらの稲が伝わった経路は諸説あるが、

○中国の江淮地帯から朝鮮半島南部を経て伝わったとする説

○長江下流域から直接九州に伝わるか、朝鮮半島経由して伝わったとする説

○中国南部から沖縄に伝わり、北上して九州南部に伝わったとする説

いずれも定説ではないが、可能性は否定できない。いずれにせよ大陸部から伝わったことは疑いの余地はない。^{8, 9, 10)}

のちに水田の開発や耕作方法、施肥など不断の努力が続けられ、米は安定した栄養を補給できる重要な食料となった。

資料館所有の米の紹介

【日本の赤米】



【中国の黒米】



【ラオスの米】



④ 昭和初期の農業について

日本の農業技術は四季農構図に描かれたように江戸時代から昭和初期まで動力という点において、大きな進歩はなく農業の形態が大きく変わるのは昭和 40 年代である。農業機械の会社は、農機の開発と技術の向上により耕運機、発動機による脱穀機、田植機、さらにコンバインを生み出し、今までの農業形態を大きく変えた。

今回のテーマは、昭和初期まで使われていた千歯扱きを体験し子ども達が農作業にどのように関わり、家族と共に生きた姿を文献やお年寄りのはなしをもとに考証する。

【四季農構図】



⑦ 脱穀機の歴史

稲は、弥生時代に広く栽培されるようになった。

脱穀は石包丁を使った穂首刈りが主流であった。おそらく当時の赤米は背が高く 1m 30 cm くらいはあったようで、のちに鎌を使って稲を刈るようになると、竹を割ってその間に穂首を入れてすごく、**扱き箸**(こきはし)が長く使われるようになった。¹²⁾

江戸時代になると鉄製の歯を持つ千歯扱きが作られた。鳥取県の倉吉では山陰地方の鉄の生産に支えられ、鉄の歯の間に稲穂をすごく千歯扱きが多く生産された。従来の扱き箸をより数倍の速さで脱穀できたので、後家倒しといわれた。その効率性が認められると関西から関東まで広く普及し、明治期から昭和初期まで脱穀の用具として使用されていた。¹¹⁾

⑤ 千歯扱きと子どもの手伝い

香寺民俗資料館の昭和初期に使用された**千歯扱き**(せんばこき)を実際に使って脱穀を体験した。

千歯扱きの葉の間に稲束を入れ勢いよく引くと穂首から粃(もみ)となって、むしろの上に落ち脱穀することができる。

子ども達は、稲束を運んだり、脱穀した藁(わら)を片付けたり年齢に応じた手伝いをした。

【千歯扱き】



脱穀が終わると藁を納屋にしまい、残った藁は、つばきとして田畑の角に保存した。藁は貴重な生活の材料であるので大切にされた。子ども達は、つばき作りの手伝いをしたがたくさんのつばきの並ぶ田んぼは遊び場でもあった。納屋にしまった藁は、むしろ、かます、縄など生活の用具を作る材料として使う。

子ども達の仕事は、わら打ちである。わらの根元は堅いので作業のしやすいように柔らかくするのである。家の土間の片隅には、半分土に埋めた大きな石があり、その上にわらを置いて槌（つち）で打つ。わら打ちである。^{5. 12. 13)}

【わら打ち】



さらに**縄**ないである。稲を束ねたり、燃料である**柴（しば）** くくったり、多くの使いみちがある。お年寄りのお話によると、小学校では**縄ない**の大会があつて優秀者を決めていたそうである。

このように子ども達は、農作業の中から生きる力と勤労という姿勢を学んだ。

せっかくの体験であるので、赤米 2; 白米 8 の割合ではがまで炊いて試食した。米がピンク色に炊き上がり美味しかった。

【はがまで炊飯】



おこわは、赤米の名残と言われている。

学生の感想

昔の子ども達がやっていた仕事を実際に体験しました。千歯扱きを使って、お米を脱穀したり、藁で縄を編んだりしました。縄作りは、見たことはありましたが、したことは無かったので経験できて良かったです。縄を編んでみて、“難しいな”と感じました。“慣れたら上手にできるのかな”と思いました。

赤米の炊飯では、白米に少しだけ赤米を入れて30分ほど炊飯しました。出来立てのご飯は最高においしかったです。普通の炊飯器で炊いたお米より、米そのものの味がしたような気がしました。

藁をねじって縄をなうのは、想像以上に難しかったです

③ 綿（わた）と子ども達の衣類

テレビでは、江戸時代の武士階級は綿（めん）だけでなく、きらびやかな絹織物を着ているが、社会の大部分を占める農民は、粗末な衣類であった。人類がはじめどのような服を着ていたか大きな謎であるが、日本の古代では、麻、藤、楮（こうぞ）などを繊維にして布を織り着用していた。

平安時代に三河地方に漂着した船から綿が伝わったとされるが、栽培に成功せず、人々は今まで通りの目の粗い衣類で重ね着をして寒さをしのいだ。

時代が過ぎ、再び綿が伝わったのは、室町時代である。再来の経緯は、諸説あるが、おそらく中国、朝鮮から伝わった説が有力である。

江戸時代になると肌ざわりや保温性など衣類としての価値が知られるにつれ、商品作物として生産が高まり各地で栽培に成功した。

衣類の目的は多くあるが、その第一は体温を調節する保温機能である。次に外から身体や皮膚を守る保護・防御としての役割である。さらに儀礼に応じた服、性別・身分・職業の表示や装飾など文化が高まるにつれて多様性が増していく。

綿の衣類は、肌ざわりがよく保温性は、麻・藤布に比べ物にならない。また、染色もしやすく色落ちも少ないので衣類として最適であった。

今回は、香寺民俗資料館に所蔵されている**綿（わた）**から種を取る**綿繰り機（わたくりき）**、**糸巻き機**で実習するとともに、江戸期から昭和初期に使われた着物を見るだけでなく、特別に試着するなど衣類の歴史を考えてみた。

⑦ 綿の栽培

- ・5月の上旬種をまく。
（春から数えて八十八夜の言い伝え）
- ・米のとぎ汁に一晩漬けると発芽しやすくなる。

芽が出たら畑に植えかえ、水をよくやり地肌が乾かないようにする。

夏の暑い日射しに照らされてグングン大きくなり1m50cm以上になる。つぼみがでる。やがて黄色い花が咲き、秋になるとつぼみが開き白い綿が出てくる。10月末頃に収穫する。

【綿のつぼみ】



摘んだ綿は種が入っているので取り除くことから始める。

【綿の種】



綿繰り機にそっとかまし、回転軸をタイミングよく回す。しかし、思うようには、種は取れず困窮する。

どちらかといえば、手で取った方が早いくらいである。¹⁶⁾

【綿繰り機】



【糸巻き機】



【機織り機】



*資料館の糸巻き機は、一部不具合があり、実習できなかったが、丹波布伝承館の写真で説明を受けた。

綿の栽培は、農家が担っていた。水の不便な田や山の畑など水田に手のかかるような土地は、綿作に転用され栽培を行った。

しかし、それは村の庄屋や仲介人に買い取られ小作人は、年貢として支払うとわずかの綿しか残らなかった。綿のいい部分は買い取られているので、いわばB級の綿であった。

農民たちは、その残った綿を利用して自らの衣類を織った。綿から均一に糸を紡ぎだす

のが難しく、途中で太くなったり細くなったりした。手先の器用さが求められ、一説には、いい糸を紡げ、機織りが上手なことが良いお嫁さんと評された。

家で、機織り機（はたおりき）を使い布にする。各家によって縞模様のパターンが違う。その技術は、家の秘伝として伝えられ、他人には絶対に教えなかった。伝えられた模様は、和紙に布切れを貼って縞帳として保存された。

江戸時代は、古着屋があり衣類の流通を担っていた。時には、衣類の盗難もあり、自分の服が被害にあっても犯人はなかなか見つからなかった。

しかし、心当たりの服は縞帳で確認し、犯人を突き止めたという。それほど縞帳は大切にされ、家の宝物であった。

仕立てられた着物は、裾（すそ）が擦り切れると上着の半てんにし、袖（そで）が傷むとチョッキにするなど布は捨てずに作り直すだけでなく、雑巾になるまで使われ、最後は燃やして灰にし、田に返した。

親の衣類は、仕立て直して子に譲った。このように、衣類は大切なもので今日のように流行が変わると捨てることというようなことはなかった。^{4. 6. 14. 15)}

今後の資源の在り方や環境問題を考えれば一考を要するであろう。

学生の感想

綿一つの中に、八個の種が入っていると知って驚きました。あの小さな綿から大きな綿入れが作れることが信じられません。

野良着を試着すると、つぎがあたりそでやえりはボロボロでした。こんなになるまで着たのかと驚きました。

3 子どもの手伝いの変化と教育

(1) 農業社会の子どもの手伝いと社会生活

子どもの手伝いは、補助的な労働だけでなく、日常生活の根幹となりうる生活能力や道徳、礼儀など社会生活に適応するための生活習慣を学び、自らの成長を促す。

①勤労意欲を養う

②質素・儉約(物を大切にし、最後まで使
いもったいないという心を養う)

③神仏を敬う(村の神社に参拝、感謝する
気持ちを養う)

④家族の中での自分の立場

⑤挨拶の仕方(尊敬語や謙譲語を使い人間
関係を円滑にする)

⑥親類・近所との付き合い方 などの学習
に関連した。²⁾

(2) 手伝いの変化

戦前の牛耕や足踏み脱穀機から戦後 20 年を過ぎると耕運機・トラクター・田植え機・コンバインなどが普及し農作業が大きく変化した。さらに、炊飯器・洗濯機・冷蔵庫などが社会に普及し、稲は多くの工程を経て育てられるが機械で労力も軽減されたので農業作業や家事の手伝いをしなくなっていく。

4 おわりに

戦後の高度経済成長期に子どもの手伝いは、短時間の家事手伝いへと急速に変化した。

少子化、核家族化など家族形態が変化し、地域社会の人々との交流や支え合いが減り、人間関係の希薄化が指摘されている。かつての手伝いにみられた伝統的しつけにも影響している。

生活習慣や礼儀作法などの育成が学校教育に期待されることとなった。体験活動が推

進され、多くの人と関わりながら体験を積み重ねることにより「社会を生き抜く力」として必要となる基礎的な能力を養う効果があると考えられている。社会で求められる仲間とのコミュニケーション能力や自立心、主体、協調性、チャレンジ精神、責任感、創造力、異なる他者と協働する能力等を育むためには、様々な体験活動が重要である。

自然の中で、これまでに触れたことのない物に触れ、その存在を認める経験を積むことで、大人になり思いどおりにならない状況に直面したときにも対応できる力が付くと期待されている。

人間関係をうまく作れない、規範意識が欠けている、ささいなことでも感情を抑えられないなど青少年が抱える様々な課題がある。

解決への糸口としてまた、課題の未然防止のためにも体験活動は有効とされている。体験活動や自然とつながる経験などを通じて日常生活を客観的に見つめ直すことができる。

個々の子どもの状況と発達段階に応じた教育の機会により基本的なコミュニケーション能力や生活習慣を身に付ける。

子どもの社会性や「思いやり」など豊かな人間性を育み、人間関係を育成することが重要とされている。

幼少期から、家族や地域、自然の中での刺激と体験活動を発達段階別・学校段階間に連続して継続的に行うことが一層効果的と考えられている。¹⁾

5 謝辞

本授業を進めるにあたり香寺民俗資料館に展示してある貴重な民具や資料を使っての体験授業や民俗学の講義をしていただきました。

また、本稿をまとめる際には、ご指導ご助

言をいただきました山本秀樹館長に感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省中央審議会・初等教育分科会
第28回配布資料, 資料2. 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向, 第2節 幼児教育の意義及び役割, <https://www.mext.go.jp/b-menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1395402.htm>
- 2) 新井真人(1993) 子どもの手伝いの変化と教育, 教育社会学研究第53集, PP. 66-86.
- 3) 三輪茂雄(1978) ものと人間の文化史 25, 臼, 法政大学出版局
- 4) 石川英輔(1997) 大江戸生活事情, 講談社文庫
- 5) 石川英輔(1997) 大江戸リサイクル事情, 講談社文庫
- 6) 杉浦日向子(2006) お江戸でござる, 新潮文庫
- 7) 杉浦日向子(2005) 一日江戸人, 新潮文庫
- 8) 保岡孝之(監修)(2002) お米なんでも大百科(全5巻), ポプラ社
- 9) 佐藤洋一郎(2018) 稲の日本史, 角川ソフィア文庫
- 10) 佐藤洋一郎(2008) イネの歴史, 京都大学学術選書
- 11) 飯沼二郎・堀尾尚志(1976) ものと人間の文化史 19, 農具, 法政大学出版局
- 12) 宮崎 清(1985) ものと人間の文化史 55-I, 藁 I, 法政大学出版局
- 13) 宮崎 清(1985) ものと人間の文化史 55-II, 藁 II, 法政大学出版局
- 14) 福井貞子(2000) ものと人間の文化史 93,

木綿口伝, 法政大学出版局

- 15) 福井貞子(2000) ものと人間の文化史 95, 野良着, 法政大学出版局
- 16) 磯貝 勇(1996) 日本の民具, 岩崎美術社
- 17) 丹波布伝承会館
<https://www.city.tamba.lg.jp/soshiki/aogakishisho/tambanuno-index.html>